宗教法人　日本神の教会連盟 CHURCH OF GOD JAPAN

神の教会

第316号
2024年
春

巻頭言

一つのことに専心して祈る

空知太栄光キリスト教会　牧師
銘形 秀則

●「説教聴聞録」という本があります。説教した牧師の本ではなく、ある信徒が説教を聞き、毎回その場でメモしたことを元に一冊にまとめた珍しい本です。教会において毎週神のことばが語られていますが、本当の説教とは、語る者と、それを聞く者とがいて初めて成り立ちます。語る者の霊性も重要ですが、聞く者の霊性も実は重要なのです。これが充分に、しかもふさわしく機能していないと、教会は建て上がっては行きません。聞く者の「聴聞力」が問われるのです。会衆の中にそうした「聴聞力」を持つ者が一人でも二人でもいるなら、神の奥義はさらに開かれていくのです。

●初代教会の人たちの特徴は、「一つのことに専心して祈る」姿です。使徒1章14節には「彼らはみな…ともに、いつも心を一つにして祈っていた」とあり、同2章42節では「彼らはいつも…祈りをしていた」とあります。訳文では分かりませんが、これらの箇所には同じ語彙があります。それは**「専心する、没頭する」**を意味する「プロスカルテレオー」の分詞です。イェシュアが昇天された後、彼らは**「あの祈りに専心して祈っていた」**（原文）のでした。「あの祈り」とは冠詞付きの祈りで、イェシュアが教えた「主の祈り」です。**主の祈り**は**「御国の福音」**のコンデンスです。「御国の福音」とはアブラハムに対する約束、ダビデに対する約束、そして多くの預言者たちが預言したことが完全にこの地上において目に見える形で実現することです。彼らは、使徒たちからイェシュアのことばを聞き、それを理解し、自分のものとするために専心して祈っていたのです。

●神に一方的に語りかけることが祈りではありません。むしろベタニアのマリアに見られる**「聞き入る」**祈り（ルカ10・39）、あるいは詩篇1篇にある**「口ずさむ（にれはむ、瞑想する）」**祈り（詩篇1・2）であったと思われます。それは聴聞力による祈りといえます。それは初代教会において「パン裂き」（使徒2・42）というみことばの分かち合いに象徴されます。ヘルモン山で神が現れ、「彼（イェシュア）の言うことを聞け」（マタ17・5）とイェシュアの三人の弟子たちに語ったことはきわめて重要です。その通りに、初代教会は毎日の「パン裂き」の中で「御国の福音」を使徒たちから繰り返し聞いたはずです。そのような霊的蓄積の中からイェシュアの生き写しのようなステパノが生まれてきたのは偶然ではありません。

●預言者エゼキエルも「食べて」「満たし」「行って」「告げよ」と神から言われました。そして彼は、神から与えられた巻物（神のことば）が「甘かった」と言っています。それは、神のご計画にある神の「トーヴ」（良さ）を知ったゆえの霊的感覚です。エゼキエルはその甘さをバビロンの捕囚となっている民に語り続けました。とりわけ33～37章にある「回復の預言」はそうです。37章の「枯れた骨がつながる」話は、死と復活から来る「甘さの極み」です。イスラエルを基軸とした神のご計画にある「甘さの極み」に目が開かれ、そこに接ぎ木される祝福を伝えることが、教会の使命ではないでしょうか。使徒パウロも、イェシュアが語った「神のご計画のすべて（御国の福音）」を「余すところなく」（原文は「怯むことなく」）知らせたと訣別説教の中で語っています（使徒20・27）。私たちも怯むことなく神のご計画の全体を伝えることが、神のみこころであると信じます。